

ヴィクトリア時代の歌姫

富山 太佳夫

1

週刊の諷刺雑誌『パンチ』が好んで標的にしたのは、言うまでもなく、政治の場に関与する人々であつた。デイズレーリやグラッドストーン他の有力な政治家たちは、ともかく権力の座にあるかぎり、滑稽にデフォルメされたり、動物になぞらえられたりしながら、さまざまの角度から繰り返し笑いを提供させられることになった。しかし、諷刺の毒性的程度についてはさておくとして、この雑誌の記事のための素材になるのが、政治家を別にするならば、固有

名をもつ特定の個人であるよりも、むしろ何らかの類型性をもつ人間であることの方が圧倒的に多かつたということは、忘れるうことのできない事実である。政治家はその職業柄やもを得ないにしても、それ以外の人々には没有必要に固有名を与えないといふのが『パンチ』の一般的な姿勢であった。今日のゴシップ漁りのジャーナリズムと関心の持ち方においては類似しているようにみえながら、なおかつ決定的な差異が感じとれる理由のひとつは、おそらくそこに求められるだろう。『パンチ』に登場する〈俗物〉や〈ジエントルマン〉や〈道路掃除人〉は名前をもたない類型としてのそれなのである。そして、この雑誌の諷刺がある種

の大人らしい品のよさを維持しつづけたという事実とこの手法とは、結果から判断するならば、決して無関係ではないはずである。

しかし、ヴィクトリア時代の文化というのは数多くの例外なしには存在しないという、きわめて健全であると同時に始末の悪い性格をもつていてるのであって、この『パンチ』という雑誌の場合も例外ではない。ひとつの例を挙げるならば、この雑誌は一八四七から五〇年にかけてジェニー・リンンドという名前の歌手の登場する記事を数多く掲載している——これは一体何のためだろうか。彼女はしばしば挿絵を伴うそれらの記事の中でどのように表象され、それを通して、社会の中にある何を言表するものとなっていたのであろうか。このエッセイで私が試みるのは、活字と挿絵によって表象されたジェニー・リンンドの輪郭線の内部に、あるいはその周辺に浮沈し、互いにぶつかり合い、互いに支えあうヴィクトリア時代のさまざまの言説と権力のありようの分析である。そこには彼女を鮮やかに浮上させると同時に、ほとんど恣意的と言つてよいやり方で彼女を『パンチ』の誌面から消してしまった制度のうごめきがあるはずである。

一八四〇年代のイギリスの、とくにロンドンの音楽事情を考えようとするときに大変興味深い文章が二つある。そのひとつが、ディケンズの編集していた『ハウスホールド・ワーズ』に一八五〇年に掲載された匿名のエッセイ「庶民生活の中の音楽」であるが、その書き出しの部分は当時の音楽事情を実に簡潔に、次のように要約してみせる。

音楽は——もちろん古典音楽のことであるが——ここ最近になつて、高い階級から低い階級に徐々に降りてきつつある。ミューズの女神はその取り巻きを変えつつあって、卑しく貧しい者たちの側に移り、貴族階級の仲間にはイタリア・オペラ以外のものは残しておかなければなりません。彼女は大衆にこそ抜群に正確な才能を恵み与えるのだ。最近では、職人や労働者のきびしい生活の中に浸透し、それを柔らげている。

劇場に足を運ぶ上流階級の音楽愛好家にとって、音楽と言

えば、イタリア、ドイツ、フランスの歌手や演奏家によるそれであるという思い込みは、この時代にも厳然として生きていた。イギリスでも大きな人気を博することになるオペラ歌手のうち、グリーンが一八三四四年に、マリオが一八三九年に、アルボーニが一八四七年にそれぞれロンドンでのデビューを果たしている⁽²⁾のも、その思い込みに対応する事実と考えていいだろう。極端な例になると、フランス語、ドイツ語、ロシア語、英語のオペラなどはまずイタリア語に翻訳しないかぎり上演されないこともあつたと⁽³⁾いう。「庶民の生活の中の音楽」というエッセイの冒頭にみられる、イタリア・オペラへの揶揄まじりの言及への背景には、そのようななかたちの音楽崇拜があつたと⁽⁴⁾いうことである。しかし、逆に、このような揶揄が成立するということ自体、このような崇拜をよしとしない感情もあつた、よしとしない人々もいたということでもあるだろう。音楽史家ニコラス・テンパレーは、「このようにイタリア趣味を氣取る半面で、ディレッタントでもない限り、音楽は紳士のやるべきことにあらず」という貴族階級の考え方もあつた⁽⁵⁾と指摘している。貴族階級の中に存在したこのような両面的の反応の裏に、宗教的な感情が結びついていたであ

らうこととは容易に推定できるのであるが、この音楽と宗教のいささかいびつではあるにしても強烈な関係は、福音主義の洗礼を受けたヴィクトリア時代の中流階級の場合には、とくにはつきりと見えてくる。もう一度テンパレーの解説を借りることにしよう。

企業家たちのうちのかなりの部分は、劇場を禁止した長い歴史をもつ宗派に属しており、それは国教会の福音主義派とほとんどの非国教諸派を含んでいた。彼らはもちろんオペラなどを奨励はしなかつたし、オラトリオを認めるといつても、それが劇場を出て、教会とか、エクセター・ホールやバーミンガム、リースの公会堂のような立派な場所に出てきたときだけの話であった。何の飾りもない讃美歌の合唱によって育てられてきた彼らは、楽器の演奏やその他の複雑な音楽を徐々にしか受け入れようとせず、それも聖書やその他

の魂を高揚させるテストが伴う場合に限られた。

中流階級の人々の間に最も広がっていたのはイタリアの音楽に対する偏見である。と言うのは、それが劇場、カトリック教会、貴族の軽薄な遊びという連想を

伴つていたからである。この階級の場合、音楽に関心のある人々はむしろ北ヨーロッパのプロテストант色の強い、落ち着いた、眞面目な音楽に目を向ける傾向があつた。⁽⁵⁾

上流と中流の人々のこのような音楽趣味を、そこに含まれる一般化から来る危険性を覺悟の上で、それでもいくらか念頭におく必要があるのは、一八四七年にロンドンにデビュしたソプラノ歌手ジエニー・リンドのイギリスにおける人気の背景に、スウェーデン出身の、きわめて信仰心のあつい彼女の人間像があつたことを見逃せないからである。別の言い方をするならば、外国人の歌手としてイギリスで人気を博すためには、音楽趣味の異なる各階層の支持を取りつけなくてはならないということでもある。幾つかの異なるアピール力をそなえていなくてはならないということである。

それでは一八四〇年代の労働者階級にとつて、音楽と関わりのある最大の話題とは何であつたろうか。今問題にしているエッセイ「庶民生活の中の音楽」は、まさしくその点を取りあげているのである。それによると、イギリスの

民衆の間にも昔から歌の伝統は存在したわけで、とくにランカシャヤやヨークシャの住民は「合唱の腕前」がすぐれており、しかもそれが「秩序と節酒と勤勉をもたらすのに大いに力があつたので、大工場主の多くが労働者に音楽を学ぶ手段を提供して、それを奨励してきた」という。しかし、最大の話題は何と言つてもジョン・ハラーによる歌唱指導の試みであつた。彼の試みは一八四〇年、ロンドンのバターシーにある訓練学校から出発した。

一八四〇年二月、彼は二〇名ほどの少年に最初の授業をしたが、この小さな初まりから、あつという間に王國全体に波及する大運動が起つたのである。この授業の成功は枢密院の委員会の注目するところとなり、ウイレム・システムをイギリスでも使えるようになしたものを含む著作が刊行されることになった。そしてこの委員会の認可のもとに、小学校の先生たちを教えるクラスが三つ、エクセター・ホールに開設され（各クラスとも百名に限定）、さらに女性の教師のための同人數のクラスがひとつ開設された。⁽⁶⁾

この歌唱運動の勢いはこれだけにはとどまらず、初等レベルの学校教育の中にも取り込まれてゆく。一八四九年にはとくにこの運動を支援するために、一般の募金活動によつて、ロンドンにセント・マーティンズ・ホールが作られ、翌年にはそこで二〇〇名もの人々が歌唱法を学ぶことになつた。その中心になつたのは、もちろん、健全な娯楽を求める貧しい階級の人々であつたろうが、問題のエッセイによると、そこに集まつてくるのは彼らのみではなかつたようである。

あらゆる階級および職業の生徒がいる。最高位の貴族もいれば、ほとんどすべての商売や専門職のひとがおり、勤勉な職工や労働者もいる。その彼らが地位や立場には関係なしに、まさしく心をひとつにして、一緒にひとつのことを追求するのである。女性の姿もちゃんと見られる。⁽⁸⁾

ヴィクトリア時代としては珍しい、階級とジェンダーに拘束されない場の成立する可能性がここには感じとれると書いていいかもしない。少なくともそこにはミュージッ

ク・ホールで歌われるのとは別種の歌が存在したはずなのである。

私が今問題にしたいのは、そうした場所で教えられ歌われていた具体的な曲目のことではない。このような歌唱運動を支持し、それを普及させたイデオロギーとは何であったのかというのが、私の関心の対象なのだ。枢密院の教育委員会の実質的な中心として動き、ハラーの活動に全面的な支持を与えたのはジエイムズ・ケイ（のちのサー・ジエイムズ・ケイリシャトルワース）であるが、その彼は、歌唱とは「勤勉で、勇敢で、誠実で宗教心のあつい労働者階級をつくるための重要な手段」であると考えていた。「そのような娯楽を好むということ自体、文明のひとつ進歩であるだろうし、時がたてば必ずや民衆を下劣な喜びから引き離す手段となるだろうし、娯楽と義務とをひとつに結びつける働きをするだろう」。彼の頭の中では、歌唱は民衆教育のための重要な手段として位置づけられていたということである。チャーティスト運動にみられるような労働者の動きを巧みに体制の中に吸収し、國家の役に立つ、勤勉で、安全な労働者を育てるための格好の手段とみなされたのである。要するに、歌唱指導は社会統制のためのひとつの手

段であった。

興味深いのは、同じように熱心な民衆教育の推進者であつたW・E・ヒックソンが、一八四二年の『ウエストミンスター評論』に発表した長文の書評の中で——この匿名の書評は『ハウスホールド・ワーズ』のエッセイとは逆に、

ハラーの歌唱指導法をきびしく批判するものとなつてゐる

——同じような考え方を表明してゐる点である。彼はまず、「過去何年かにわたつて、労働者階級に合唱の勉強を奨励し、それを国民教育の一環として学校の中に導入しよう」という努力がなされてきたことを認め、それをよしとする。その理由というのは、この新しい楽しみによつて、彼らを「ジンとビールとタバコ」の害から切り離すことができるかもしれないからである。「刑罰もモラルの説教も民衆の心には届かない——だとすれば、なぜ娯楽という手段を使つて彼らの心に働きかけようとしたのか」。しかし娯楽としての合唱を活用することは言つても、それは決して單なる娯楽としてということではなくて、必ず宗教問題が何かのかたちで絡んでいた。

さて考えた。……音楽をすべての学校で教えるべきだとする原則の正しさは（場合によつては、讃美歌の詠唱のことしか考えていないこともあるようだが）、今や大ブリテンとアイルランドのすべての教育組織によつて認められている。⁽¹⁰⁾

各種の節酒（あるいは禁酒）協会の背景にはほぼ例外なしに何らかの宗教組織があつたことを考え合わせるならば、ここで示唆されているのも、やはり音楽と宗教の結びつきだということになるだろう。もうひとつエッセイ「庶民生活中の音楽」の結びのところで強調されているのも、実はそのような結びつきである。

音楽は——その考え方の巧拙は別にして——国中の……大半の学校の課目のひとつになつてゐる。何百といふ静かな奥まった田舎の教会でも、純粹に人の声だけの合唱によつて礼拝をする試みがなされている。田舎の牧師でも、音楽の訓練をうけて、合唱隊や会衆の歌の指揮をとれるひとが何百人といるのであり、彼らは歌と趣味、節度、信仰をうまく結びつける努力をし

各種の節酒教会は、音楽を酒飲み矯正の手段と結びつ

ているのである。⁽¹¹⁾

要するに、一九世紀半ばのイギリスの、とくに中流から下層の人々と音楽との関わりを云々しようとするとき、宗教問題との交渉という側面を忘れるわけにはいかないとということだ。それを逆に言うならば、宗教のある部分と強い関わりをもちながら登場してくる〈音楽〉は強い支持を期待できたということである。

イタリア系のオペラも得意としたジェニー・リンドは、しかしながら、スウェーデンの出身であり、強い信仰に支えられた女性で——そのため彼女は若くしてオペラの舞台から引退することになるのだが——慈善活動もさかんに行なつた。ということは、これまで見てきたようなイギリスの音楽事情からして、社会の各層から最も歓迎されやすい条件をそなえていたということである。現に『パンチ』は熱狂的に彼女を歓迎した。ただし、いかにもこの諷刺雑誌らしい特異なひねりをそこに加味しての話ではあるけれども。

ジェニー・リンドが初めてロンドンに到着したのは一八四七年四月のことであった。この年の二月『パンチ』はすでに彼女に関する記事をのせ始めているのだが、しかし、それを理解するためには、少し前の契約をめぐるトラブルの問題まで遡らなくてはならない。ドイツで大評判になつてゐるこのスウェーデン生まれのソプラノ歌手をイギリスに呼ぶことを最初に考えてその交渉にあたつたのは、ドルリー・レインの女王劇場とコヴェント・ガーデンの王立オペラ・ハウス両方の運営にあたつていたアレグザンダー・パンである。彼は一八四五年の初めにベルリンに乗り込んで、同年の一〇月一九日からドルリー・レインの劇場の舞台に立つという契約を彼女と結んだが、彼女の方は、書類上の不備と初めての国に対する不安とから、この契約を守らなかつた。正式な契約に成功したのは——そして、怒るパンとの交渉のいっさいを引き受けたのは——へイマーケットの女王劇場の支配人ベンジャミン・ラムレーであつた。そのさいに、彼女と親交のあつた作曲家メンデ

ルスゾーンの勧めが大きく働いたと言われる。⁽¹²⁾

『パンチ』が最初に狙いをつけたのは、まさしくこの契約をめぐるトラブルの問題であった。ただし、そうは言つても、リンドが諷刺や笑いの標的になつてゐるということではなくて、むしろその役割を果たしたのは「詩人バン」の方である。二月六日号の記事「詩人バンとスウェーデンのナイチンゲール」(挿絵はリチャード・ドイル)では、詩人と歌姫のやりとりをユーモラスに創作しながら、彼女に、「詩人のバンさん、私は出たくありません、法の力を使われても」と言わせている。それに対して、二月一三日号の「詩人バンからジェニー・リンドへ」では、詩人の怠懶やるかたない想いに焦点が絞られている。

なぜまたドゥルリー・レインの劇場で

第一声を響かせようとはしないのか。

イギリスはあなたの歌声を待ち望むのに、

私のナイチンゲール、我が小鳥よ。

あなたの結んだ契約のいつさいは

ただの偽りか——風のように空しい？

かくも裏切られでは、気も狂う

最後の第三連までくると、「あなたの才能に報酬はおしまない／ラムレーの方がもっとはずむそうだけど」となる。戯作詩は『パンチ』の最も得意とするジャンルであるが、彼女はこのような戯作詩の中でいささか手荒い最初の歓迎を受けたことになる。少なくともここにはのちの崇拜を、いわゆる「ジェニー・リンド・フィーバー」を連想させるものは感じとれない。

次にジェニー・リンドという名前が登場するのは、四月一七日号の「ドゥルリー・レイン基金の晩餐会」という記事と次の号の「ドゥルリー・レイン基金の晩餐会におけるジェニー・リンド」という記事においてである。もつとも、この名前をもつのは歌姫本人ではない、メスの象なのである。「我らがジェニー・リンド——詩人バンは美しき歌姫本人を獲得することができなかつたので、動物の方を手に入れる腹を決めたのである。」歌手本人のロンドンのデビューオークションでパン側の仕掛けたこの悪戯は、いかにも『パンチ』の飛びつきそうなアイディアではある。本人の登場する前にこのよき笑いの渦をかき

我が不実なるジェニー・リンドよ。

たてられてしまうというのは、確かに最悪の予備条件と言つていいはずである。

しかし、それから三週間後の記事「パンチとジエニー・リンド」（挿絵はジョン・リーチ）において、この雑誌の態度は約変する。つまり、熱狂的な賛美の方向に突っ走りしてしまうのだ。

正真正銘のジエニー・リンドのデビューという大事件にパンチがまったく手を貸さないというのは、あり得ないことであった。世界のプリマ・ドンナとしての彼女の登場はオペラの歴史の忘れがたい一頁となるだろう。……彼女は、舞台に登場してからずつと我々を魅了しつづけたのであって、オペラが終わつたときにもその魔力は断ち切りにくかつた。『タイムズ』の批評家が、彼女の与えた喜びを「新たなる衝撃」と呼んだのはその通りで、しかもこの新しい衝撃は繰り返しうけたくなる類のものなのだ……。ラムレーは、スウェーデンのナイチンゲールを、いや、天国の歌鳥をハイマーケットの鳥小屋に連れてくることによって、このシーズンの成功どころか、これから先何年もの成功を

確保したのである。⁽¹⁶⁾

五月二二日号に掲載された「スウェーデンのナイチンゲールに寄せるパンチの頌歌」は、彼女に対する賛美の頂点にあたるものひとつとしていいだろうが、その第三連には、「ジエニー・リンドよ、正直に告白しよう／あなたは私の正気を奪つたひと／あなたにならば頭を垂れよう」とある（図1。左下の署名からして、ジョン・リーチの手になる挿絵である）。

『パンチ』はひとたび興味深いテーマにゆきつくと、繰り返しそれを取りあげて、そのテーマのもつ可能性を使い尽そうとする習癖をもつていた。この場合もその例外ではないのだが、具体的には、それはどのようななかたちを取つたのか、次にはその点を検討してみなくてはならない。彼女を称えるためにどの部分を強調してゆくのか——それは彼女の美点を引きだす努力になると同時に、そのさいに投射される『パンチ』の、さらにはヴィクトリア時代のイデオロギーのあぶり出されてくる場にもなるはずである。考えてみれば、『パンチ』の中にジエニー・リンドその人は決して存在しないのだ。我々が眼にしているのは、そのよ

うなイデオロギーを具体化させる装置としてのひとりの歌手の表象なのである。

当然のことではあるが、まず第一に力説されたのはすぐれたオペラ歌手として的一面であった。そのことがよく分かるのは、すでに引用した五月一五日の記事であるが、彼女の得意とした曲六つの中の代表的な場面の中央にその横顔を配した一八四八年七月二九日の挿絵（作者はリチャード・ド・ドイル）もその典型とみなしていいだろう（図2）。

さらに、彼女を「スウエーデンのナイチングール」と呼んだことは、いかにも『パンチ』らしい、〈鳥〉のイメージを活用したユーモアを生むことになる。例えば、一八四八年五月一三日号の記事「パンチの博物誌、スウエーデンのナイチングール」の中の次のようにくだり。「彼女はすべての歌い鳥の中で最も優美であって、身長は約五フィート、しかしその翼は大きくて、心暖まる深い感謝と賞讃の風に運ばれて、大陸も海も越えてゆく。その姿は飾り気がない、正直で、優美で恥ずかしがり屋で、控えめな身のこなし。その巣はこの広い世界の懷に抱かれているが、そこにはとても大きな数字の書き込まれた素敵な紙幣が敷きつめられている」。⁽¹⁸⁾この記事 자체は決して否定的なものでは

ない。彼女が莫大な出演料を手にしたことをユーモラスに指摘しているだけの話である。しかし、彼女の性格について、正直で控えめと言っている点には注意していいだろう。言うまでもなく、彼女のような性格はどの時代であつても人々から愛されるであろうが、ヴィクトリア時代のイギリスはとくにそのような性格をひとつ理想としたのである。しかもイタリア・オペラは上流階級が愛好したといふこともあって、華美や堕落の連想を伴うことが多く、この時代の小説の中ではしばしば犯罪絡みで扱われたという背景を考え合わせてみると、ジェニー・リンドがその固定観念の対極にある存在として人々の注目の的になつたことが、幾分なりとも理解できるであろう。

もつとも、ヴィクトリア時代の場合、かりにこのような基本条件があつたとしても、それだけでは熱狂と呼ばれるほどのブームを起こすには不十分だったはずである。この時代にひとつの強烈な社会的話題となつて、多種多様な言説を表面化させるために必要な条件というのは、それがすべての階級に波及するということであった。人種とジェンダーに関わる次元はさておくとしても、この階級を越えて広がらないかぎりは、社会的な運動というものは考えられ

なかつたのである。歌唱運動の広がりを報告する『ハウス・ホールド・ワーズ』のエッセイ自体がこの点をきちんと力説していたことは、すでに見た通りである。だとすると、ジエニー・リンドの場合にはそれがどのようなかたちをとつて現れたのであろうか。

彼女がイタリア・オペラの歌えるソプラノ歌手として上流階級の音楽ファンに受け容れられたことは間違いない。何よりもヴィクトリア女王とアルバート殿下自身が彼女の歌声を愛し、また多くの貴族が同じような姿勢をとつたといふことがある。もともとオペラ好きであつた貴族階級の音楽好きにとっても、彼女には何の抵抗もなかつたはずである。それでは中流階級にとつてはどうであつたのか。一八四七年五月二九日号の記事「人々の口にする唯一の名前」は、「ジエニー・リンド」という名前が、人々の心の内に、本物の妄想に近い熱狂を生みだしている……シティはジエニー・リンドの話題でふらふらだし、ウエスト・エンドになると、御察しの通り、うわ言を口にするという始末⁽²⁰⁾と指摘している。『パンチ』の誇張を割り引いて考へるとても、この歌手の評判が上流の人士の住むウエスト・エンドのみならず、金融地区であるシティをもかけめぐつたこ

とが、ここから読みとれるはずである。ただし、この記事の中にはイースト・エンド、つまり貧民地区への言及はない。その意味では、この熱狂がおおむね中、上流階級のものであることが示唆されていくように思えるのである。

中流階級におけるジエニー・リンド熱狂が正確には彼女の歌あるいは身の処し方のどの部分に対する反応としてあつたのか、一八四七年から五〇年にかけての『パンチ』の数多い関連記事の中からそれを特定するのは決して容易なことではない。だが、彼女に関する記事のうちの幾つかから推定できるのは、その感動の少なくともある部分は彼女の宗教的な姿勢からきているだろうということである。一八四九年五月五日号の「ジエニー・リンドの兎の足」はその点を主題化した記事である（挿絵はリチャード・ドイル）。その後半はジエニーと兎の足の対話のかたちになつていて、が、彼女は、「でも、私の友だちの言う通り、劇場には悪しきことがあるんです」と発言することになつていて。かつてイギリスのプロテスタンントたちは劇場を閉鎖するという措置をとつたことがある。もちろんヴィクトリア時代にそのような措置が復活することはなかつたが、一八世紀後半からの福音主義の運動は国教会の内と外に大きな影響力

をふるい、宗教感情を高揚させ、モラルの厳格化に力を貸したこととはまぎれもない事実である。その福音主義の運動の中心になつたのは、階級的にみれば、中流階級から下の人々であつた。つまり、国民のほとんどすべての人々がそれに関わり得たということである。⁽²¹⁾ そのような宗教事情を考えあわせると、彼女のもつ宗教性というのは、当時の中流階級の音楽ファンにとつては、彼女を受け容れるための最も分かりやすい口実になつたはずである。彼女の正直でつましい性格はその宗教性の証しであると同時に、福音主義の重視した性格でもあつた。

問題は、彼女の宗教性がいささか度を越しすぎる傾向をもつということであつた。こここの点に関しては、『パンチ』もその崇拜をいささか抑制せざるを得ないと判断したらしい。そのことが端的に表出されているのが五月五日号の記事なのである。その中には、ただ「呼び出される」という意味と、「神の召命を受ける」という意味をもつ called という語を利用した次のようなやりとりが書き込まれている。

このまま喋り続ければ、呼び出しのかかる前に化粧が終わらないよ。

ジェニー 呼び出しだって！ その言葉は使わないで。とっても不幸な気持ちになるから、とくに今は。この何カ月の間、私は「神の呼び出しを受けている」ってずっと言われてきたんですから。

兎の足 確かに呼び出しがかかるつてはいるよ、ジェニー。信仰篤き者を天に選ばれし者のひとりとする仕事を果たすようになってね。その喉に宿る天使に呼び出しされていたんだ。世に出てて、人々に喜びと幸福を降らせよ、とね。きみはひとの心の感情を目覚めさせ、解釈し、ひとの記憶を生涯にわたるハーモニーの棲み家とするように求められているんだ。きみへの呼び出しあは——

ジェニー よく分かりました。でも、私が呼び出しだって言つているのはそのことじゃないんです。敬虔な方々が銀貨を喜んで払つて下さるようなコンサートやホールでのみ歌うように神の召命を受けていると感じないと、ずっと教えられてきたのです。⁽²²⁾

兎の足 さあ、さあ、ジェニー。序曲が始まつたよ。

この会話は、彼女の宗教的姿勢のうちに、カルヴァニズムの色彩の濃い福音主義が——イギリスの人々の目にはそう映る部分が——あつたことを認め、それを軽く揶揄しているのである。現に彼女は、巡業先のノリッジの司教の助言もあって、各地のオペラ劇場での活動はわずか五年でやめてしまい、「コンサートやホール」⁽²³⁾にその活動を限定してしまったのである。

特徴的なのは、彼女のなかにある過度の宗教性を揶揄するにあたって『パンチ』がエクセター・ホールを持ち出してくることである。例えば、彼女がオペラ劇場に復帰しようとすることは、「彼女をしばらくの間エクセター・ホールの斑岩の柱に……縛りつけていた恐ろしく真面目な考えを捨てた」と表現される。また別の記事の中には、「素直な性格のジェニーに、劇場の赤い化粧と衣裳が罪であることを説き続け、繊細な女優を冷たい形式主義者に変えてしまったエクセター・ホール。⁽²⁴⁾あの勿体ぶつた言葉はナイチンゲールを殺してしまう！」とある。一体この建物はいかなる性格を持っていたのであらうか。ジョン・ティムズの『ロンドンの見所』（一八五五年）によると、この建物は当時とくに二つの方向で有名であった。そのひとつは音楽の

催し物の会場としてということで、ここではヘンデルやハイドンやモーツアルトが演奏されているし、メンデルスゾーンは自曲の指揮をしているのである。実はジェニー・リンドもここで歌っているし、すでに見たようにジョン・ハラーの歌唱運動もここを経由して拡大していくのである。しかし、それと同時に、この建物は奴隸解放論者の拠点ともなつたし、「五月の集会」には主として非国教会系の各宗派がつどう宗教会場でもあった。まさしく、「恐ろしく真面目な考え方」を各宗派が演説する場であったのである。だとすれば、そこに集まる各宗派の狂信的と言つてよいほどの生真面目さを批判しつづけた『パンチ』が、彼女の過度の宗教性とエクセター・ホールを結びつけたというのは、当時の文脈に戻つてみれば、きわめて判りやすいやり口だったということになるだろう。⁽²⁶⁾

しかし、もうひとつ問題が残つている。人口の七〇パーセント以上を占める労働者階級の少なくとも或る部分にまで彼女の評判が波及してゆくとしたら、それはいかなる経路によつてかという問題である。もちろん労働者階級にしても、エクセター・ホールや彼女の巡業先の各地方都市で彼女の声に接する機会はもてたであらうが——一八四〇

年代の歌唱運動の成果として、地方でも彼女の歌への関心が高まつたということも考えられなくはないし、あたかもそうした関心に答えるかのように、彼女は「ホーム・スウェード・ホーム」のようなイギリスの曲を歌つてゐる——『パンチ』は、彼女と貧しい階級の接点をそれとは別のことろに求めている。

そのような接点のありかを示唆する典型的な例が一八四九年一月一三日号の記事「冬に歌うナイチングール」(挿絵はリチャード・ドイル)である。挿絵の中央に立つジェニーリンドは貧しい人々に施し物をする女性として描かれている(図3)。伝記上の事実としては、彼女が直接にこのような行為を行なつたことはなかつたようであるし、一八五〇年代にイギリスに定住するようになつてからも、彼女の交際範囲というのは王侯貴族や中流階級の人々に限られている。それにもかかわらずこのように彼女と貧民階級を結びつける表象が成立したのは、実際に彼女が慈善のためのコンサートを開いたり、出演料の一部を寄附したりといふことをしたからであると思われる。そうした金はもちろん直接に貧しい人々の手に渡されたわけではなく、病院等の施設を作つたり、貧しい音楽家のための奨学金として使

われたのであるが、慈善に強い関心がある女性の歌手といふ評判はただちにこの挿絵のような表象となつて定着されることになったのである。しかも彼女のもつ宗教性が、このほとんど天使的な表象を裏から支えることになったと思われる。この挿絵につけられた詩にはこうした事情がよく現われている。

美しいひとよ、その歌声にならぶ者はなく
あなたの声は、耳よりもさらに深く響きゆく
その歌声は清く、やさしく、たおやかで
美しい心のかなでる妙なる調べ

弱き声たちがナイチングールの名をたたえる
貧しき者を救い、慈善をよくするひとの名を²⁸

かくしてこの北欧出身の歌手は、イタリア・オペラの名手としてイギリスの中、上流の音楽愛好家やそれを気取る人々に愛されると同時に、ややもするとイタリア・オペラにつきまといがちであつた華美性や退廃のイメージとは無縁の清純な宗教性のおかげで——さらに言えば、当時のイ

ギリスの福音主義の雰囲気となじむ宗教性をもつていたおかげで——中流から下層の音楽好きにも受け容れられたのである。彼らのために、彼女は、オペラではなくて、故国スウェーデンやイギリスの曲を歌つたりした。そして慈善活動。彼女は貧しい人々を助ける〈天使〉として偶像化されていったのである。彼女がフロレンス・ナイチンゲールの慈善活動を手伝うために一八五六年三月一日にコンサートを開いたときの会場は、エクセター・ホールであった。⁽²⁹⁾ 彼女は文字通りイギリスの神話であり、宝であった。

一八五〇年の秋に彼女のアメリカ公演が決まると、『パンチ』は彼女の身の上を大いに案じてみせる。まず九月九日号の「我等の小鳥」には

ニューヨークに上陸するジェニー・リンドを最悪のものが待っている。そこでは興業師バーナムが、行列を用意して彼女を待ちかまえているとか！ ジェニーがあのような商売人の手に落ちるとは実になげかわしい。バーナムの扱う商品は小人や人工の人魚で十分だ。

一〇月五月号の「ジェニー・リンドとアメリカ市民」

(挿絵はジョン・リーチ) (図4) では、彼女のアメリカ到着をユーモラスに紹介する一方で、「親指トムやその他の民衆好みのアイドルに投資してきたのと同じように、ジェニー・リンドにも投資した興業師のバーナム氏」と揶揄する。そして、「ナイチンゲールはアメリカの国旗を目にすると——茶目っ氣を發揮して、それから奴隸売買や〈黒人の〉新聞の編集者フレデリック・ダグラス氏の処遇について耳にしていたことを漠然と思い出して——〈何と美しい自由の旗でしよう。すべての国の抑圧された人々があの旗を崇拜しています〉と叫んだそうである」と報告している。これは南北戦争のはば一〇年前の、そして『アンクル・トムの小屋』(一八五二年) が出版される少し前の話である。ジョン・リーチの挿絵は、当時のイギリスのもつていた対アメリカの固定観念にあふれている。「ジェニー一世の戴冠式——アメリカ市民の女王」というキャプションのちぐはぐさもさることながら、煙草と独特の帽子によつてアメリカ人を表わすところなど、いかにも『パンチ』らしい偏見と言つべきだろう。戴冠式をとり行なうのは聖職者ではなく、玉座は振り椅子、小姓はソーダ水をもつてゐる。右半分の集団を見ても、貴族らしい顔つきはひとつもなく、イ

ギリスが舞台ならば、さしづめ貧民の一団というところであろうか——『パンチ』の考えるアメリカとは所詮その程度のものでしかなかったのだ。ジェニー・リンンドはここにいたつて、そうした文化的偏見を引きだす触媒と化したのである。

4

彼女に関する『パンチ』の記事については、もうひとつどうしても触れておかねばならないことがある。それは挿絵を、当時のこの雑誌の人気画家ジョン・リーチとリチャード・ドイルが担当しているということだ。とくにドイルは一八四九年の『パンチ』に「イギリス人の風俗と習慣」を四一回にわたって連載し、二五歳にして人気の頂点についた。その第九回目がヘイマーケットの劇場に彼女の歌を聞きに押しよせる人々の光景になつているのである(図5、及び5)。その彼は音楽に強い関心を抱いていて、同シリーズの第六回目および第四〇回目(図6、7)にも音楽会の様子を描き出している。その意味ではうつつけの画家といつてよかつたろう。さらにその上に、きわめて個人的

な事情も絡んでいた。ドイル自身が熱烈なジェニー・リンードのファンであつて、その憧れの歌手を描くにあたつては特別の想いを込めたらしいということである。⁽³²⁾『パンチ』の記事は確かにこの歌手自体の魅力と話題性に触発されたものである一方で、その記事に挿絵を描く人気画家がそこにいたということの相乗効果も大きな力をもつたようと思われる。

しかし、この幸福な結びつきはいつまでも続かなかつた。その最大の理由はドイルが『パンチ』をやめてしまつたことである。一八五〇年九月、ローマ教皇ピオ九世がイギリスにローマ・カトリックの監督区制度を復活させると宣言したことに対し猛反発して、議会での議論から民衆暴動にいたまでの反カトリック運動が起つたとき、『パンチ』もまた激しいキャンペーンを行なつた。その誌面にはローマ教皇に対する諷刺だけでなく、エドワード・ピュージイを軸としたオックスフォード運動に対する批判と諷刺がずらりとならぶことになる。ドイルは敬虔なカトリックであつた。一八五〇年の末、彼がこの事態に耐えきれずに『パンチ』を辞したとき、あとに残つたのは、仕事をめぐる両者の間のトラブルのみであつた。そして彼の辞任を契機とし

て、彼がこよなく愛した歌手の姿もその面で大きな話題となることがなくなるのである。

註

(∞) Ibid., p. 163. なぬくわーどのシテ D. N. B 及び Cyril Ehrlich, *The Music Profession in Britain since the Eighteenth*

Century: A Social History (Oxford: Clarendon Press, 1985),

Bernarr Rainbow, "The Rise of Popular Music Education")

in Nineteenth-Century England," *Victorian Studies*, vol. 30

(²) [W. E. Hickson]: "Music, and the Committee of Council
(1900), p. 51.

for Education," *The Westminster Review*, vol. 37 (January

1842), p. 2.

(二) "Music in Humble Life," p. 164. 例を挙げるなど。

ブロンテ姉妹の父パトリックも、まだ若い頃、プレズビテ

リアン派の付属学校で歌唱の指導をしている。Barbara

and Gareth Lloyd Evans, *Everyman's Companion to the Brontës* (London, 1997).

(London: J. M. Dent, 1987), p. 67 を参照。

York: AMS Press, 1978), pp. 32-45. ジの著者たるヨーロー

アーネスト・ヘンリイ・ニューマン C. S. Dessim, *John Henry Newman* (1966; Oxford: Oxford University Press 1980), pp. 1-2 参照。

⁶ See also Dr. John W. Dodus, *The Age of Transition, A Biography of England 1841-1851* (1952; Westport: Green-

wood Press, 1970), pp. 304-07.

(13) "The Poet Bunn to Jenny Lind," *Punch*, vol. XI (13 February, 1847), p. 71. Alexander Bunn ジュニヤー D. N. B. の参考。

(14) *Ibid.*

(15) "Jenny Lind at the Drury Lane Fund-Dinner," *Punch*, vol. XI (April 23, 1847), p. 165. 次の週の

175 ページ "Jenny Lind at Drury Lane" ジュニヤー ジュニヤー 記事がある。象の挿絵等で示されている。

(16) "Punch and Jenny Lind," *Punch*, vol. XI (May 15, 1847), p. 197. 199 ページ "Jenny-Linden, A Dreadful Engagement between the Swedish Nightingale and the Poet Bunn." ジュニヤー 図柄を示す鐵作詩等で示されている。

(17) "Punch's Ode to the Swedish Nightingale," *Punch*, vol. XI (May 22, 1847), p. 208.

(22) "Punch's Natural History. The Swedish Nightingale (Curraea Lumlyana)," *Punch*, vol. XIV (13 May, 1848), p. 197.

(20) "The One Name before the Public," *Punch*, vol. XII (29 May, 1847), p. 220.

(21) Doreen Rosman, *Evangelicals and Culture* (London: Croom Helm, 1984), 134-46 参照。

(22) "Jenny Lind and the Hare's-foot," *Punch*, vol. XVI (5 May, 1849), p. 175.

(23) Mrs Raymond Maude, *op. cit.*, p. 97.

(24) "Jenny Lind and the Hare's-foot," p. 175.

(25) "Jenny Lind in Trouble," *Punch*, vol. XVII (21 April, 1849), p. 157.

(26) H. G. Vyse, John Sims, *Curiosities of London* (London: David Bogue, 1855), pp. 287-88 を参照。

Mrs Raymond Maude, *op. cit.*, p. 136 は、「彼女の人生と動機の多くの部分を作った深い宗教感情……。幼ない頃に祖母から素朴な敬虔心を吹き込まれた彼女は、ルター派の信仰を堅持した。聖書が彼女の導き手であり、支えであった。……生涯を通じてあらんと教会に通つた」とある。彼女をアメリカに呼んだ興業師バークス、P. T. Barnum, *Struggles and Triumphs* (1855; Harmondsworth Middlesex : Penguin Books, 1981), p. 204 は、「彼女は、人間はいかでに行かぬ時は、いつもやがて習慣をもつていた」

アカデミー。

(27) 最初の恋愛を歌った作曲家がトーマス・チャーチルハドソン

Q. Mrs Raymond Maudes, *op. cit.*, p. 111; Arthur Jacobs, *A*

thur Sullivan; A Victorian Musician (New York: Oxford

University Press, 1984), pp. 40-41.

(28) "The Nightingale that sings in the winter," *Punch*, vol.

XVI (13 January 1849), p. 15.

(29) Mrs Raymond Maudes, *op. cit.*, p. 181.

(30) "Our Little Bird," *Punch*, vol. XIX (7 September, 1850),
p. 101.

(31) "Jenny Lind and the Americans," *Punch*, vol. XIX (5
October, 1850), p. 146; cf. P. T. Barnum, *op. cit.*, pp.

197-212.

(32) ハーマニ・ツィムラウゼンRodney Engen, Richard

Doyle (Stroud, Glos.: Catalpa press, 1983), pp. 52-53, 参照

博幸『ヴィクトリア朝挿絵画家列伝——ハイケハム』『ベ

ルチ』誌の回刊』(図書出版社、一九九〇年)、一八九一—

一一三頁及びリチャード・ツィムラウゼン『挿絵の中のイギリス』

(弘文堂、一九九〇年)一一四頁の富山の解説を参照。
なおこの本は「イギリスの風俗と習慣」の全訳である。

Punch's Ode to the Swedish Nightingale.



J ENNY, before thy feet the
dust I munch ;
Despise me not, although
there grows
Between my shoulders a pro-
digious hunch ;
Because I have a crooked
nose,
And in a head of mon-
strous size,
Carry a pair of goggle
eyes ;—
Yes, JENNY, thou hast fairly
vanquish'd *Punch*.

Full many are the warblers
I have heard,
Whose song has won my
approbation ;
But still it always seemed to
me absurd
To pay them aught like
adoration ;
For I esteem'd that it
would be
Unworthy of my dignity
By that extreme emotion to
be stirr'd.

But, JENNY LIND, I candidly avow
Thou hast bereft me of my wits ;
Before thee I am not ashamed to bow.
What sparrows, wagtails, and tomtits,
To thee, sweet Nightingale of Sweden,
Meet songstress for the bowers of Eden,
Compared, appear all other song-birds now !

It is not, JENNY, for thy peerless art
That I adore thee—for the sake
Of sweetest pleasure which thy tones impart,
Or wondrous quaver, trill, or shake,
Nor yet because, with vocal strength,
Thou hold'st a note of certain length :
It is because thou singest to the heart.

And further, why thou charm'st this heart of wood,
Delightful JENNY, wouldst thou know ?
Because thou look'st so gentle and so good,
And all accounts declare thee so ;
Thy acting shows a sense of duty,
An earnest love of truth and beauty,
An aim to make thine author understood.

To thee should Genius, burning to outpour
Its lofty soul in song, intrust
Its inspirations ; and once more
The mighty masters, laid in dust,
On earth appear ; and BEETHOVEN,
MOZART, and WEBER, come again,
And task for thee their spirits' richest lore.

Not oft I give a sentimental squeak,
Nor deal in homage ; but thou hast,
Fair maid, drawn wooden tears down *Punch*'s cheek,
And that is an achievement vast :
Thus, therefore, doth he bare his crown,
And throw him at thy footstool down,
Hoping that thou wilt smile on him this week.

THE JENNY LIND SHIELD, PRESENTED BY MR. PUNCH.



図 2

THE NIGHTINGALE THAT SINGS IN THE WINTER.



WHEN the waters are stark, and the crystalline snow
Sparkles keen and unchanged in the morn's ruddy glow,
And the prism-coloured icicles flash in the sun,
The bitter cold stills all the song-birds but one.

Now the linnet, the lark, and the throstle are dumb,
E'en the stout little wren's gallant heart is o'ercome,
And the Nightingale, warbler so wondrous of tone,
That sings in the winter, is tuneful alone.

Sweetest creature, in song wi'out rival or peer,
Far more inwardly vibrate thy notes than the ear,
For there speaks in that music, pure, gentle, refined,
The exquisite voice of a beautiful mind—

Of a spirit of earnestness, goodness, and truth,
Of a heart full of tender compassion and ruth,
Ever ready to comfort, and succour, and bless,
In sorrow and suffering, in want and distress.

And the Nightingale's name by faint voices is praised,
For poverty aided and Charities raised;
Not more good was the bird in whom childhood believes—
The Redbreast that cover'd the children with leaves.

And in tribute and love to a Memory revered,
By her magical voice noble monuments reared,
The high-minded communion with Genius attest,
Which gloriously thrills in the Nightingale's breast.

Now this Nightingale rare, in the winter who sings,
Being not yet a seraph, is one without wings;
And her name, which has travell'd as wide as the wind,
Is kind-hearted, generous, dear JENNY LIND.

JENNY LIND AND THE AMERICANS.

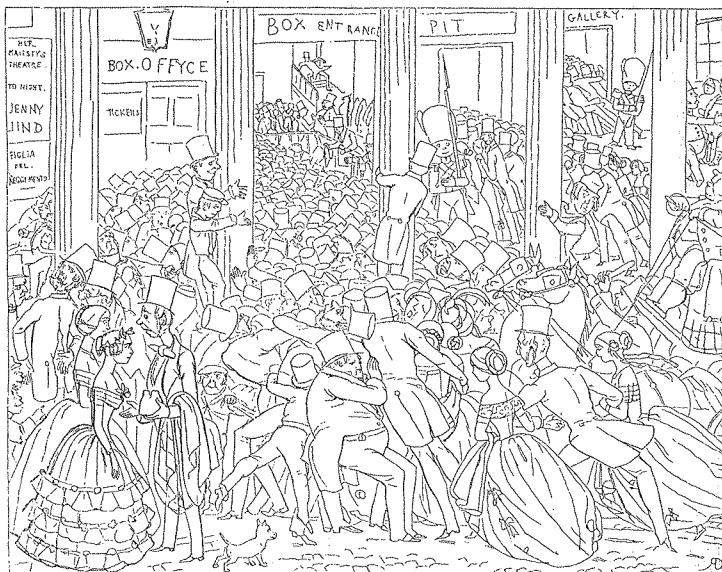
From our own Reporters.



CORONATION OF JENNY THE FIRST—QUEEN OF THE AMERICANS

图 4

MANNERS AND CUSTOMS OF YE ENGLYSHE IN 1849. No. 9.



YE PUBLICK ITS EXCYEMENTE ON YE APPEARANCE OF MISS LIND

図5

A VISIT TO JENNY LIND.

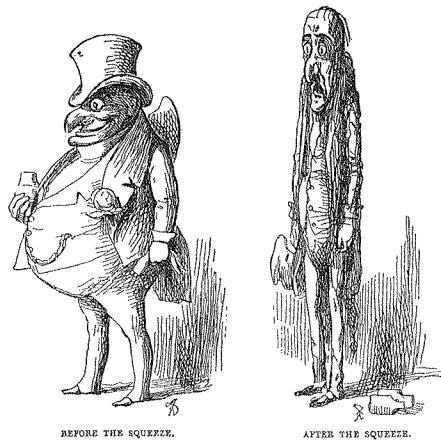


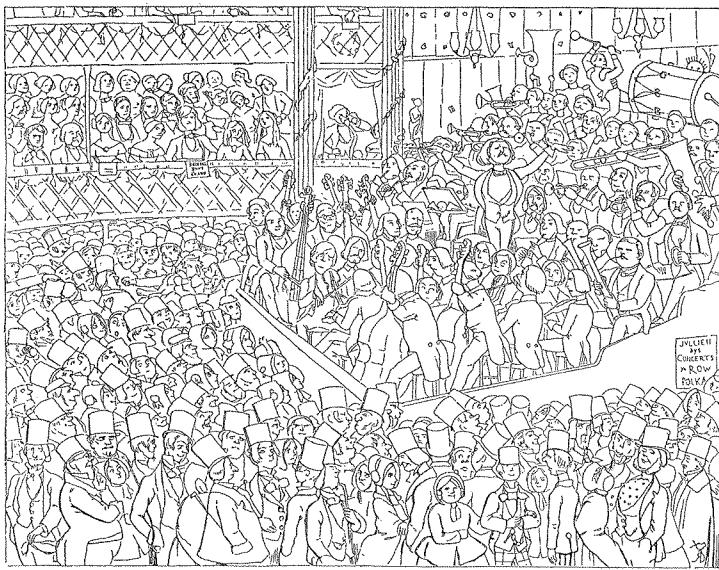
図5' 1848年5月20日号より。リンドを聞きに行くと、パンチ氏の腹も、混雑にもまれてすつきりしてしまう。挿絵は足元のサインからして、リチャード・ドイル。

MANNERS AND CUSTOMS OF YE ENGLYSHE IN 1849. N° 6.



6

MANNERS AND CUSTOMS OF Y^E ENGLYSHE IN 1849 N^o 40



A PROMENADE CONCERT.

图 7